

論文要旨

『如来秘密経』の研究

—その成立問題と仏教史における位置付けの解明を中心に—

文化科学専攻

伊久間洋光

本研究では、3世紀初訳の初期大乘経典『如来秘密経』に関し、主にその梵文写本を用いて解析を進め、その成立問題、仏教史における位置、教説の形成過程について検討した。以下ではそれらを通して明らかになった点を整理する。

『如来秘密経』には苦行から転法輪までの仏伝が含まれている。その仏伝は大乘の仏伝 *Lalitavistara* (以下 LV) の系統であった。同系統であるそれら LV と『如来秘密経』の仏伝の増広過程において、両典籍が相互に影響を与えていることが確かめられた。即ち、LV の増広過程において『如来秘密経』の仏伝からの借用がなされ、逆に、『如来秘密経』の増広過程において再び LV からの借用がなされた。そのような『如来秘密経』の仏伝の相互関係は、両経典の相互影響を諸本の増広過程において正確に辿り得る点で貴重な例である。そこからは、同系統である二つの仏伝を互いに借用しながら増広させていくという、大乘経典における仏伝の伝承過程の一つを読み取ることができる。

『如来秘密経』の諸本のうち、竺法護訳『密迹金剛力士経』には、他の『如来秘密経』の異本に比べ、より古 LV の痕跡が残されている。『如来秘密経』の発展段階において、それらは改変・削除されていった。また、『普曜経』は古 LV の原型を留めていると考えられている。『普曜経』に残され、LV の発展段階で改変・削除された古 LV のいくつかの挿話が、『如来秘密経』の諸本に残されている。それは『密迹金剛力士経』に多い。

係る『如来秘密経』の仏伝は、LV 及び『首楞嚴三昧経』の獅子座の神変に見られる仏陀観に基づき、苦行から転法輪までの仏伝の諸相を再解釈したものであった。また、その仏陀観は一音説法と共通している。さらに、『如来秘密経』の仏伝が、古 LV を素材としながら、如来の三密に纏められる『如来秘密経』の仏陀観に基づいて編纂されたことも確認された。その仏陀観に沿った改変は『如来秘密経』の増広過程においても進められた。

LV 系の仏伝を有する『如来秘密経』には梵文写本が現存している。その初訳は、LV の初訳より 20 年早い 288 年になされた。そのことは、中国の資料に基づき LV の成立年代を初訳の 308 年より大幅に遡らせる岡野潔博士の推定を、インド側の資料から間接的に裏付ける。

以上に加え、初期大乘経典である『如来秘密経』の成立問題を検討するには、部派仏教との関係を分析する必要がある。『如来秘密経』の教説においては、『異部宗輪論』の記述、仏の六十種の音声、菩薩の世間随順思想、LV の増広箇所を検討等から、大衆部と関連する点が認められた。

そのような『如来秘密経』は、6世紀に初訳され、『宝性論』の影響が指摘される般若経典『勝天王般若経』の主たる編纂材料となった。『勝天王般若経』においては、『如来秘密経』の経文は固有名詞を変更され、般若波羅蜜を主題として纏め直された。

『勝天王般若波羅蜜経』第12章「陀羅尼品」においては、『勝天王般若経』自身が借用関係の示唆をなしている。またシャーンタマティ菩薩を巡り、『勝天王般若経』中に二つの異なった層が存在する。訳語の検討からは、翻訳者月婆首那自身が、『勝天王般若経』作成グループの一員或いはそれに近い位置にいた可能性が認められた。また『勝天王般若経』と『無上依経』の関係及び『大乘起信論』序の記述を鑑み、月婆首那と真谛が同一の経典作成グループの周辺にいた可能性も認められた。

『如来秘密経』はさらに、『法華経』「見宝塔品」チベット訳増広個所に影響を与えた。その『法華経』「見宝塔品」チベット訳増広個所は、『法華経』と共通しながらさらに発展し、法身を認めている『如来秘密経』の仏陀観に基づき、「見宝塔品」の仏陀観を再解釈したものであった。そこでは、『如来秘密経』の仏陀観のうち、特に如来の一字不説が採られた。

その『如来秘密経』の一字不説論は、経典の増広過程において一音説法から発展した教説である。増広部分における経典自身の言及から、『如来秘密経』の一字不説論が「法に音響がなく文字がなく音がなく言詞がない」という『如来秘密経』の文字論と一音説法の整合性を意図して成立した可能性が認められた。

以上の論に加え、本研究では、付論1として、『如来秘密経』の梵文写本のうち、如来の秘密に関する箇所と仏伝の記述の箇所の校訂と和訳を付した。付論2では、東京大学総合図書館所蔵の *Tathāgataguhyā-dhāraṇī* と『如来秘密経』梵文写本の当該箇所の翻刻を対照させ、異同を提示した。またチベット訳（デルゲ版）及び漢訳2本（竺法護、法護）と対照させた。付論3では、新出『無量寿経』 (*Larger Sukhāvativyūha*)断簡を含む『如来秘密経』梵文写本 1a の翻刻を提示し、藤田宏達博士の校訂との異読を提示した。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	伊 久 間 洋 光
論文審査担当者	(主査) 教授 桜井 宗信 教授 木村 敏明 准教授 谷山 洋三 准教授 西村 直子
論 文 名	『如来秘密経』の研究—その成立問題と仏教史における位置付けの解明を中心に—
<p>本論文は、初期大乘仏教経典の一つであり「如来蔵」や「如来の三密」という重要思想の典拠の一つと目されている『如来秘密経』を文献学的に考究した成果であって、序論、4章からなる本論、結論及び3項目の付篇からなる。</p> <p>序論では、『如来秘密経』が「一字不説論」や「如来の三密」等の大乘仏教における重要な教理の典拠でありながら、今に到るまで十分な考究が行われて来なかった状況を述べ、また同経の梵文写本やチベット語訳・漢訳という基本資料の所在、及び同経全体の梗概を提示する。その上で本研究の目的が、校訂テキストの整定と翻訳分析及び他の大乘経典等の文献資料との比較という文献学的手法によって、『如来秘密経』の成立過程や影響関係等を明らかにし、以て『如来秘密経』の成立経過及び同経のインド仏教史における位置を定める点に有ることを述べる。</p> <p>続く第1章では、現在唯一存在が明らかな梵文写本 (The Asiatic Society 所蔵 Śāstrī18) の内容を蔵・漢訳本との比較を通じて検討し、それが断簡でありしかも順序に乱れが有るうえ、第1葉が『無量寿経』の冒頭部であることを明らかにする。また『如来秘密経』第25章の一部に相当し梵文写本の伝わる『如来秘密陀羅尼 (Tathāgataguhyā(kā)-dhāraṇī)』東大所蔵4写本の検討をも加えて、第2章及び付篇1で提示される梵文校訂テキストの整定 (全体の6割強に相当) へと繋げている。併せて『如来秘密経』の具名に変遷のあったことを諸資料の比較より論ずる。第2章では同経の成立に関わる問題が扱われ、『如来秘密経』が示す仏伝について、その記載の構成、及び「一字不説」・「仏の六十種音声」・「菩薩の世間随順思想」等のトピックに着目し、<i>Lalitavistara</i> 諸本や <i>Mahāvastu</i>、『首楞嚴三昧経』、『異部宗輪論』等に見られる記述との比較を通じて、<i>Lalitavistara</i> 諸本と『如来秘密経』諸本間の相互影響関係による「仏伝」の編纂増広経過を論ずると共に、「大衆部」の系統に特徴的な思想が含まれている点をも明らかにして今後の考究課題の押さえ所とする。第3章では更に『勝天王般若経』及び『法華経』を検討資料に加えて、それらと『如来秘密経』の関係を探ることで同経のインド仏教史上における位置付けを論じており、同経の内容を踏まえた (或いは直接借用した) 形で『勝天王般若経』が纏められたと想定されること、後者の漢訳者である月婆首那が『勝天王般若経』の作成自体に関わった可能性の有ること、一部のチベット語訳版本に見られる『法華経』「見宝塔品」増広箇所が『如来秘密経』の法身観に基づいて纏められたことなど、多くの新たな知見を提示している。本論部最後の第4章では『如来秘密経』を特徴付ける思想の一つ「一字不説」の考察を行い、これが同経の言語観と「一音説法」説との整合を図るべくその増広過程で挿入された可能性が強いことを指摘して、同経が辿った展開過程の具体的一面を描出している。</p> <p>最後に結論では以上の成果を纏めた上で、それを踏まえて『如来秘密経』に関して更に考究すべき点を今後の課題として挙げ、全体を締め括る。</p> <p>以上述べてきたように、本論文はインド大乘仏教研究の進展に寄与する点を多々含んでおり、その提出者は博士 (文学) の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判断される。</p>	